宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第26集

YAMANAKAMAE

山中前遺跡

一般県道霧島公園小林線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第26集

YAMANAKAMAE

山中前遺跡

一般県道霧島公園小林線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年

宮崎県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深いご理解をいただき厚くお礼申し上げます。

このたび宮崎県教育委員会では、一般県道霧島公園小林線道路改良工事に伴い、山中前遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回の調査では、縄文時代から古代にかけての遺構・遺物が検出されました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導・ご助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成12年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　田　中　　守

例　　言

1．本書は、一般県道霧島公園小林線道路改良工事に伴い宮崎県教育委員会が行った山中前の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査は平成11年4月12日から同年5月21日まで行った。

4．現地での実測・写真撮影等の記録は主に甲斐貴充、廣田晶子が行い、空中写真撮影は業者に委託した。

5．整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成、実測、トレースは甲斐が整理補助員の協力を得て行った。

6．本書で使用した位置図は国土地理院発行の５万分の１図を基に作成した。

7．土層断面及び土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。

8．本書で使用した方位は、第１・５・９図は座標北（座標第Ⅱ系）で、その他は磁北（磁針方位は西偏約5.5°）ある。レベルは海抜絶対高である。

9．本書使用した遺構略号は以下のとおりである。
　ＳＥ・・・溝状遺構

10．本書の執筆は第Ⅰ章―１を長津宗重が、その他を甲斐が担当し、編集は甲斐が行った。

11．出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯……1

第２節　調査の組織……1

第Ⅱ章　調査の概要

第１節 遺跡の位置と環境……2

第２節 調査の経過……5

第３節 基本層序……5

第Ⅲ章　調査の記録

第１節 縄文時代……8

第２節 その他の時代……12

第Ⅳ章　まとめ……17

挿図目次

第１図　遺跡周辺位置図……3

第２図　山中前遺跡調査範囲図……4

第３図　山中前遺跡基本土層柱状図……5

第４図　山中前遺跡土層断面図……6

第５図　山中前遺跡遺物・遺構分布図……7

第６図　縄文時代土器(1)……9

第７図　縄文時代土器(2)……10

第８図　縄文時代石器……11

第９図　溝状遺構……13

第10図　溝状遺構土層断面図……14

第11図　表土・その他包含層出土土器・鉄器……15

表目次

第１表　出土石器・鉄器観察表……15

第２表　出土土器観察表……16

図版目次

図版１～４……19～22

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

小林土木事務所の県道霧島公園小林線道路改築事業に伴う道路拡幅で平成10年度に計画されている事業区内に山中前遺跡の範囲内が含まれているため、県教育委員会文化課が確認調査を行う予定であったが諸般の事情で小林教育委員会社会教育課に行ってもらうことになった。

そこで小林市教育委員会社会教育課の中村真由美主事の指導で平成10年11月２日～11日に確認調査を行った。1.5ｍ×1.5ｍのトレンチを11ケ所設定しアカホヤ、カシワバン下の褐色土、暗褐色土層まで調査した結果第１トレンチの暗褐色土層から土器片が第４トレンチで褐色土層から縄文時代後期の西平式土器片やチャート片が出土し第６トレンチの黒褐色土層から炭化物が検出された。第３．７～10トレンチからは遺物は出土しなかった。

この確認調査の結果を踏まえて文化課と埋蔵文化財センターで協議した結果本調査の必要があるが10年度は埋蔵文化財センターの調査スケジュールは満杯なので本調査は11年度に延期せざるを得ないとの結論になった。この結論を基に文化課と小林土木事務所が協議を行い事業区内の本調査は埋蔵文化財センターが11年度に行うことで了解を得た。

第２節　調査の組織

山中前遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体　　宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所　　長	田中　守
副　所　長	江口　京子
庶務係長	児玉　和昭
調査第二係長	青山　尚友
主査（調整担当）	谷口　武範
主事（調査担当）	甲斐　貴充
調査員（嘱　託）	廣田　晶子

試掘・事業調整担当	長津　宗重（県教育委員会文化課・平成10年度）
	東　憲章（県教育委員会文化課・平成11年度）

第II章　調査の概要

第１節　遺跡の位置と環境　（第１図）

山中前遺跡（第１図１）は、宮崎県小林市大字細野字山中前に所在する。小林市は、北の裏日向山地、東の諸県山地北西支脈、南の霧島火山、西の加久藤盆地に囲まれた小林盆地に位置する。

本遺跡は、夷守岳（標高1,344 m）東面に広がる扇状地を流れる立脇川の左岸に位置する。周辺の標高200～400 mの扇状地上では、竹山遺跡（大字細野字竹山・第１図２）・前ノ原遺跡群（大字細野字前ノ原他・第１図３）・山中遺跡群（大字細野字山中・今坊・第１図４）など縄文～弥生時代の遺跡が未調査ながら数多く確認されている。特筆すべきは1963・1964年に山中前遺跡で調査が行われ、縄文時代後期の敷石住居が確認されている（註１）。

その他、本遺跡の周辺遺跡について時代別に概略を述べる。縄文時代の遺跡としては、内屋敷遺跡（大字真方字内屋敷・第１図５）・本田遺跡（大字東方字坂下・第１図６）や平木場遺跡（大字南西方字平木場・第１図７）がある。内屋敷遺跡では、前平式土器をはじめとする縄文早期前半の土器や石器類が出土している。本田遺跡では、押型文土器・前平式土器・塞ノ神式土器・曽畑式土器・石器類が出土している。平木場遺跡では、押型文土器・曽畑式土器が出土している。また、内屋敷遺跡では縄文時代早期の平地住居跡11基が、本田遺跡では縄文時代前期の竪穴住居１基が確認されている。弥生時代の遺跡は調査例が少ないが、水落遺跡（大字細野字水落・脇ノ上・第１図８）があり、弥生時代後期の土器が出土するとともに、６基の竪穴住居が確認されている。

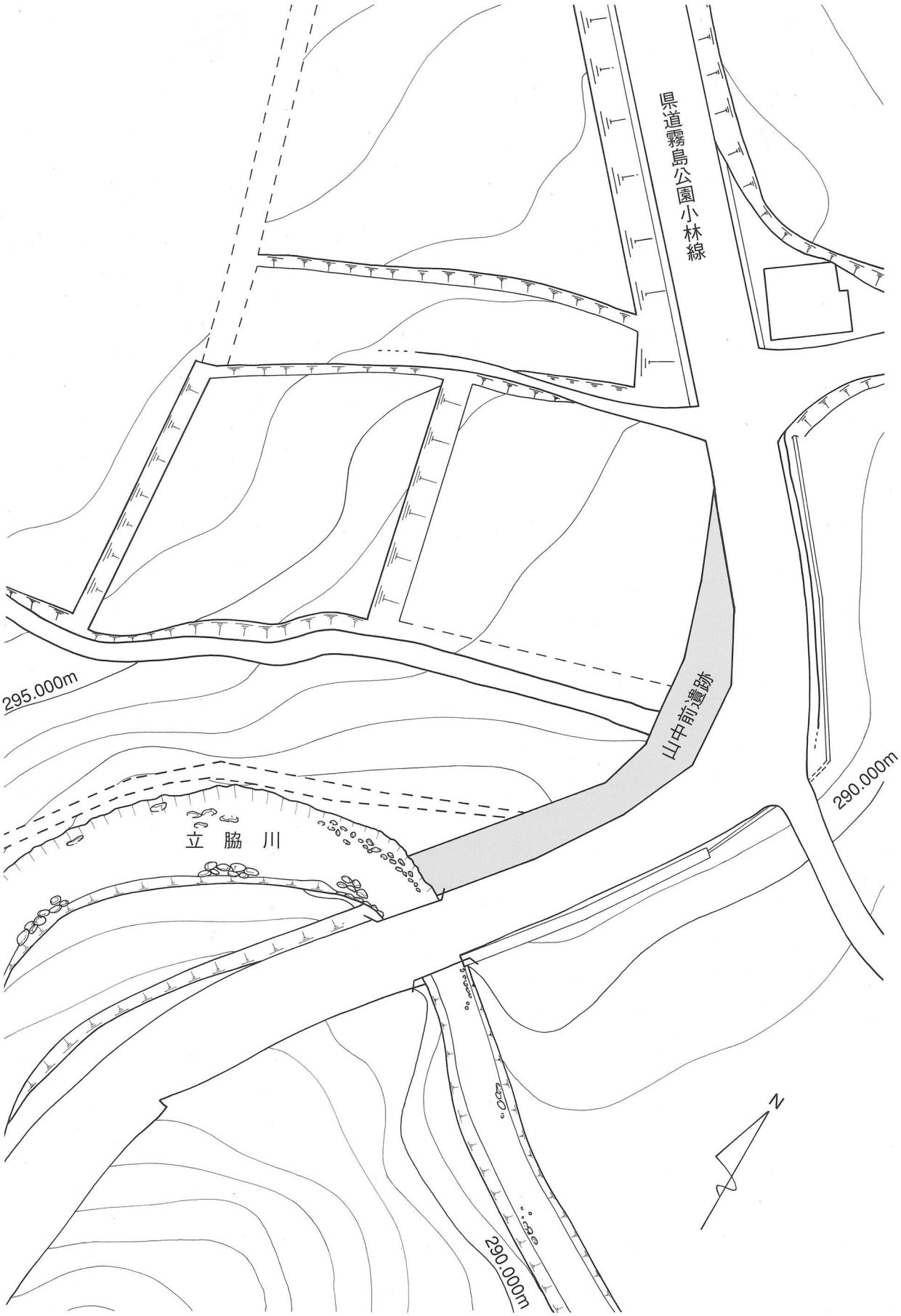
（註１）『宮崎県文化財調査報告書　第九輯』中に、「小林市中山前遺跡調査」（これは文章から推察するに、「山中前遺跡」のことであって、「中山前」は誤りであると思われる。）の記述がある。1963・1964年調査の山中前遺跡は、場所が明確でなく今回調査分との位置関係が不明瞭であることから、幾分問題はあるが同じ山中前遺跡として扱う。なお、1963・1964年調査の山中前遺跡を本告書において示す場合、「山中前遺跡（1963・1964年調査分）」と記述する。この（　）書きのない場合は今回調査分のことを示す。

【引用参考文献】

1964年「小林市中山前遺跡調査」『宮崎県文化財調査報告書第九輯』 宮崎県教育委員会
1993年『小林市遺跡詳細分布調査報告書』小林市埋蔵文化財調査報告書第７集　小林市教育委員会
1999年『内屋敷遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第14集 宮崎県埋蔵文化財センター

1	山中前遺跡	2	竹山遺跡	3	前ノ原遺跡群	4	山中遺跡群
5	内屋敷遺跡	6	本田遺跡	7	平木場遺跡	8	水落遺跡

第１図　遺跡周辺位置図



第２図　山中前遺跡遺跡調査範囲図(1／500)

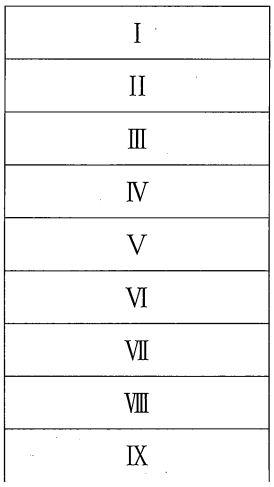
第２節　調査の経過

発掘調査は、一般県道霧島公園小林線道路改良事業予定地での試掘調査により良好な遺物包含層が確認されたという結果を受けて実施した。調査対象面積は、道路拡幅工事分の 224㎡ となった。

重機によって、表土の除去を行った。調査区は狭小の範囲であったにも関わらず、氾濫等によって不安定な堆積状況を呈していた。作業員の人力によって表土以下の層を掘り下げると、調査区南側で溝状遺構２条が検出された。溝状遺構完掘後、さらに第Ⅷ層下部まで掘り下げを行うと、比較的まとまった形で土器・石器が出土した。その後、第Ⅸ層まで掘り下げ確認を行ったが、遺構・遺物の検出は認めることができなかったために調査を終了した。なお、調査区を横切る形で個人所有道があったが、確認の結果遺物・遺構の残存する可能性は低く発掘調査は必要のないものと判断し、調査対象地より除外した。

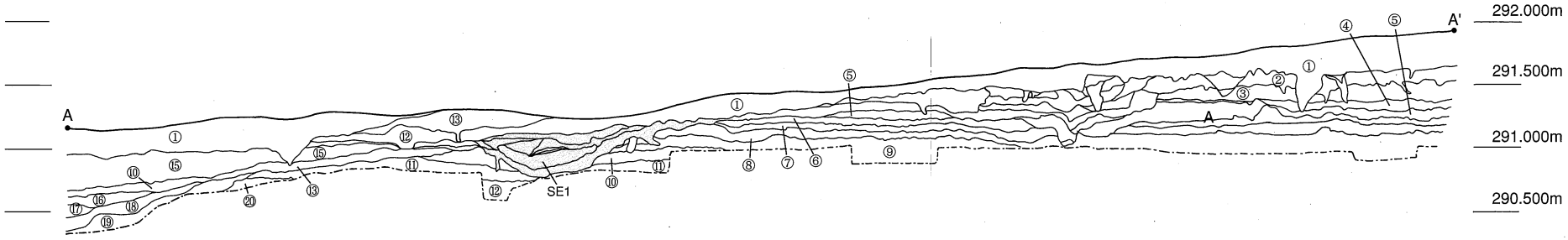
第３節　基本層序

山中前の基本層序を第３図に示した。遺跡が立脇川の近くに位置するため、氾濫等による浸食を多く受けたと考えられ、若干不安定な層序を形成する。第Ⅰ層（表土）は、やや軟質の黒褐色土で 20 ～ 30cm の厚みがある。年代幅の広い遺物を含む。第Ⅱ層は、すこし硬質な暗褐色土で 10cn ぐらいの厚さがある。第Ⅲ層は、やや硬質の暗黄褐色土で、全体に青灰色軽石粒を含む。第Ⅳ・Ⅴ層は、やや硬質の暗褐色土である。第Ⅳ層は少量の橙色・青灰色軽石粒を含む。第Ⅴ層は多量の橙色・青灰色軽石粒を含む。第Ⅵ層は、褐色土を少量含む青灰色砂質土である。第Ⅶ層は、やや硬質の褐色土であり、下部からは縄文時代晩期の遺物が出土する。縄文時代晩期の包含層である。第Ⅷ層は、やや硬質の黄褐色土であり、明黄褐色がブロック状に混入する。縄文時代晩期の包含層である。第Ⅸ層は、やや硬質の暗黄褐色土である。



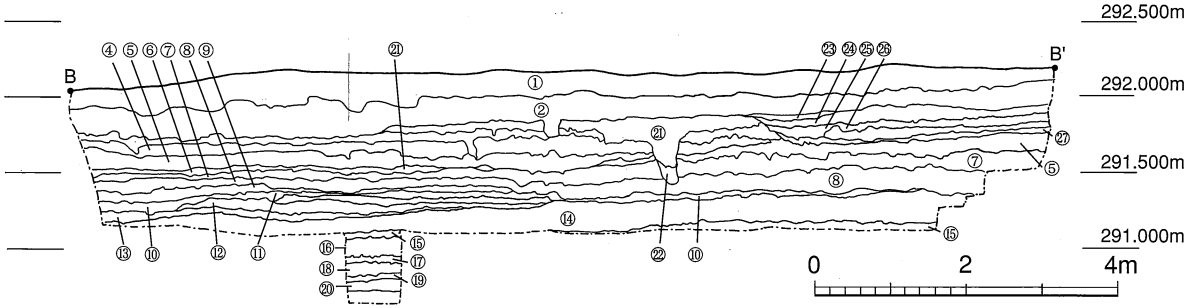
第Ⅰ層　黒褐色土　（Hue 7.5YR２／１）表土。
第Ⅱ層　暗褐色土　（Hue 10YR３／３）やや硬質
第Ⅲ層　暗黄褐色土　（Hue 7.5YR４／４）やや硬質
第Ⅳ層　暗褐色土　（Hue 10YR４／４）やや硬質
第Ⅴ層　暗褐色土　（Hue 10YR５／４）やや硬質
第Ⅵ層　青灰色砂質土　（Hue 10BG６／１）砂質土の中に褐色土を僅かに含む。
第Ⅶ層　褐色土　（Hue 10YR５／４）
第Ⅷ層　黄褐色土　（Hue 10YR５／６）
第Ⅸ層　暗黄褐色土　（Hue 10YR４／６）

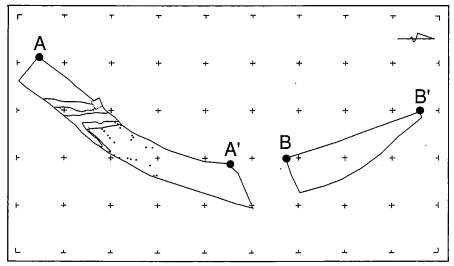
第３図　山中前遺跡基本土層柱状図



A～A' 土層註記

第①層…黒褐色土。表土。幅広い年代の遺物を含む。基本層序の第Ⅰ層
第②層…暗褐色土。漸移層または攪乱土。基本層序の第Ⅱ層
第③層…暗黄褐色土。上部に青灰色軽石粒を多量に含む。基本層序の第Ⅲ層
第④層…暗褐色土。橙色軽石粒(φ約 1cm)と青灰色軽石粒を少量含む。基本層序の第Ⅳ層
第⑤層…暗褐色土。橙色軽石粒と青灰色軽石粒(φ約 2 ～ 3mm)を僅含む。基本層序の第Ⅴ層
第⑥層…青灰色砂質土。上面が波状であり流水による作用が想定される。基本層序の第Ⅵ層
第⑦層…褐色土。下部に僅かではあるが、縄文時代晩期の遺物を含む。基本層序の第Ⅶ層
第⑧層…黄褐色土。明黄褐色土と黄褐色土がブロック状に堆積している。縄文時代晩期の遺物を含む。基本層序の第Ⅷ層
第⑨層…暗黄褐色土。暗黄褐色土と黄褐色土がブロック状に堆積している。
第⑩層…黄褐色土。明黄褐色土と黄褐色土がブロック状に堆積している。
第⑪層…暗黄褐色土。小円礫が混じる。
第⑫層…黒褐色土。第①層と酷似。表土だと考えられる。
第⑬層…暗黒褐色土。これも表土の一部だと考えられる。
第⑭層…暗褐色土。僅かに橙色の軽石粒を含む。
第⑮層…黒褐色土。流れ込みの土だと考えられる。幅広い年代の遺物が検出される。
第⑯層…暗橙褐色土混暗褐色土。ブロック状の暗橙褐色土を多く含む。
第⑰層…暗褐色土。砂質土を含みサラサラしている。
第⑱層…黒オリーブ褐色土。僅かに砂質をもつ。
第⑲層…暗褐色砂質土。砂質が強くボロボロしている。
第⑳層…暗橙褐色土。おそらくアカホヤ火山灰土。

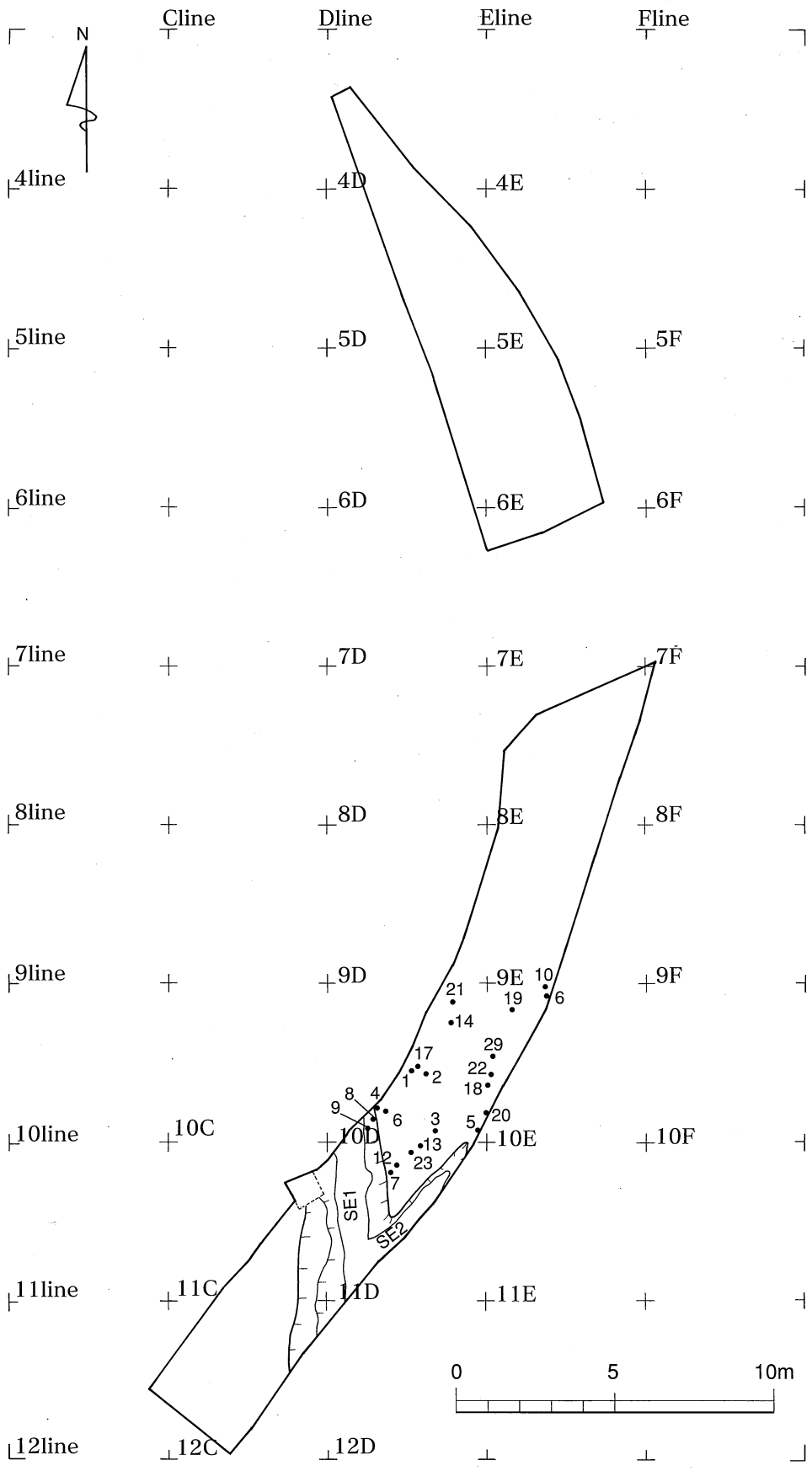




B～B' 土層註記

第①層…黒褐色土。表土。基本層序の第Ⅰ層。
第②層…暗褐色土。基本層序の第Ⅱ層。下部の部分的なところに乳白色スコリア粒を含む。
第③層…暗黄褐色土。細かい土粒より構成されている。
第④層…白灰褐色土。しまりが強く硬い。
第⑤層…褐色土。白灰褐色土粒(φ約 1 ～ 2mm)と橙褐色土粒 (φ約 3mm) を含む。
第⑥層…スコリア混暗褐色土。暗灰褐色スコリアを多く含む。やや硬めでしまりあり。
第⑦層…黄褐色土。粘性がわずかにある。黄褐色軽石粒 (φ約 1 ～ 7mm) を少量含む。
第⑧層…褐色土。黄褐色軽石粒(φ約 1 ～ 10mm)・白色砂質土粒 (φ約 2mm) を少量含む。
第⑨層…褐色土。橙褐色土粒 (φ1 ～ 7mm) を含む。土質はかたく粘性あり。
第⑩層…暗灰褐色土。暗灰褐色のスコリア粒(φ約 1 ～ 5mm)を多量に含む。土質は硬い。
第⑪層…暗灰褐色スコリア混褐色土。暗灰褐色のスコリア粒(φ約 0.5mm)を多量に含む。
第⑫層…黄褐色土。土質はしまりがなく軟らかい。橙褐色土粒(φ約 5mm)を含む。
第⑬層…暗灰色。暗褐色のスコリア粒(φ約 0.5mm)と橙褐色土粒(φ約 3mm)を多く含む
第⑭層…暗黄褐色土。土粒は細かく、土質は非常に硬い。橙褐色土粒を含む。
第⑮層…暗オリーブ褐色土。暗灰褐色土塊を多く含む。
第⑯層…褐色土。土粒はきめ細かく、土質はしまりがなく軟らかい。
第⑰層…暗灰色褐色土。暗灰褐色スコリア粒(φ約 0.5mm)を含む。土質はしまりがあり硬い。
第⑱層…青灰褐色土混褐色土。青灰褐色砂質土粒(φ約 1.5mm)を多量に含む。やや粘性あり。
第⑲層…暗灰色土。暗褐色スコリア粒(φ0.5 ～ 10mm)を多量に含む。土質は硬い。
第⑳層…暗褐色土。土質はやや硬め。土粒は細かく粘性がある。炭化物片 (φ5mm 前後) を含む。
第㉑層…黒褐色土。土質はやや硬め。乳白色スコリア粒(φ2 ～ 10mm)を僅かに含む。
第㉒層…褐色土。土質は少ししまりがありやや硬め。土粒は細かく粘性がある。
第㉓層…灰褐色土。乳白色スコリア粒を多量に含む。層上部にラミナ状堆積が確認できる。
第㉔層…黒褐色土。土粒は細かく、土質はふつう。乳白色スコリア粒を少量含む。
第㉕層…明褐色土。土粒は細かく、土質はやわらかい。褐色土粒(φ2mm 前後)を含む。
第㉖層…灰色土。土粒は細かく、しまりがあり硬い。
第㉗層…暗灰色土。暗灰色スコリア粒(φ0.5mm 前後)を含む。

第 4 図　土層断面図(1 ／ 50)



第５図　山中前遺跡遺物・遺構分布図(1／200)

第Ⅲ章　調査の記録

第１節 縄文時代の遺構と遺物

基本層序の第Ⅶ層（第３図参照）の下部より土器・石器が出土した。

・土　器（第６図・第７図）

縄文時代晩期に位置づけられる土器が出土した。それらは、器形や文様により分類が可能である。ここでは、分類の基準と根拠を示し、若干の説明を加える。なお、本書に掲載した資料についての詳細は観察表を参照とされたい。

１類（第６図１～３）

外側に向けて大きく開く口縁部で、頸部と胴部が「く」字状に屈曲する。口唇部は断面形が舌状に尖る形状を呈する。器壁は７～８㎜と薄い。外器面・内器面ともに、幅広い板目状工具を用いて横方向に丁寧なナデを施す。頸部の屈曲部分には、調整境界の可能性もあるが、段を設けている。

１は口唇部に縦位３本の短沈線を施すリボン状突起をもち、口唇部がわずかに内傾する。２は内器面に２つの穿孔をもち、そのうちのひとつの孔は未貫通で外器面に達していない。３は口縁部のみの出土であるが、２と同一個体の可能性がある。

２類（第６図４～６）

いずれも口縁部のみの出土である。口唇部は、断面形が方形状を呈し、若干肥厚させる。器壁は薄い。内・外器面ともに横・斜方向に粗めのナデを施す。

４は内・外器面に斜方向の、６は内器面に横方向・外器面に斜方向のナデを施す。いずれも器壁は薄く（厚さ７～８㎜）、口唇部を若干肥厚している。５は風化著しく詳しい調整等は不明であるが、断面形などから察するに２類に入ると考えられる。

３類（第６図８～10）

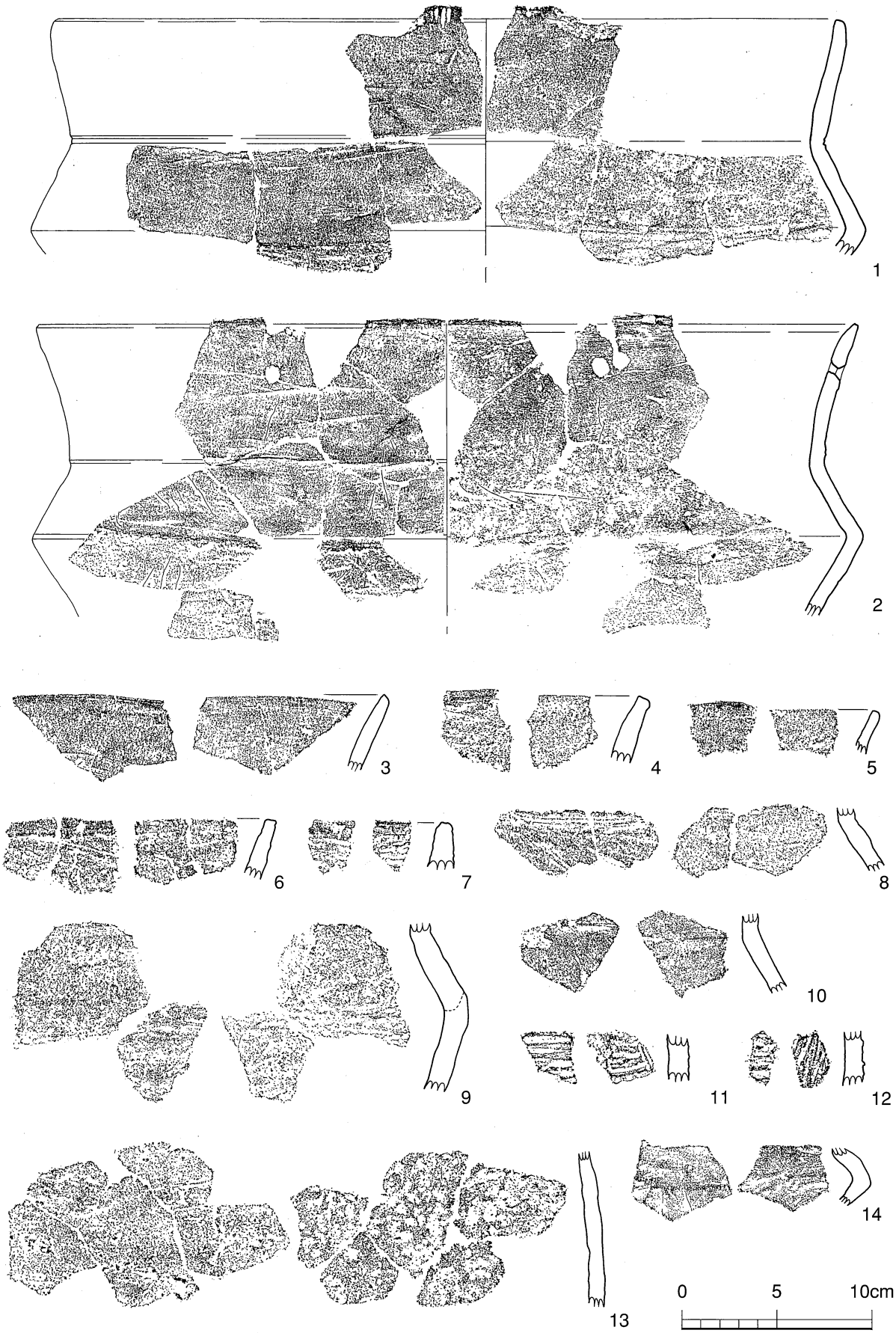
１類同様胴部が「く」字状に屈曲するが、若干緩やかな屈曲である。器壁は10～13㎜と厚めである。外器面・内器面ともに、板目状工具を用いて横・斜方向にナデを施す。ナデ調整は若干粗めで工具痕が条痕のように残る。

８・10は頸部から胴部にかけての部分である。いずれも頸部の屈曲部に、調整境界の可能性もあるが、段を設けている。８は、外器面は斜方向・内器面は横方向にナデを施す。10は、内・外器面ともに斜方向にナデを施す。９は胴部であり、緩やかに「く」字状を呈する。内・外器面ともに横方向のナデを施す。

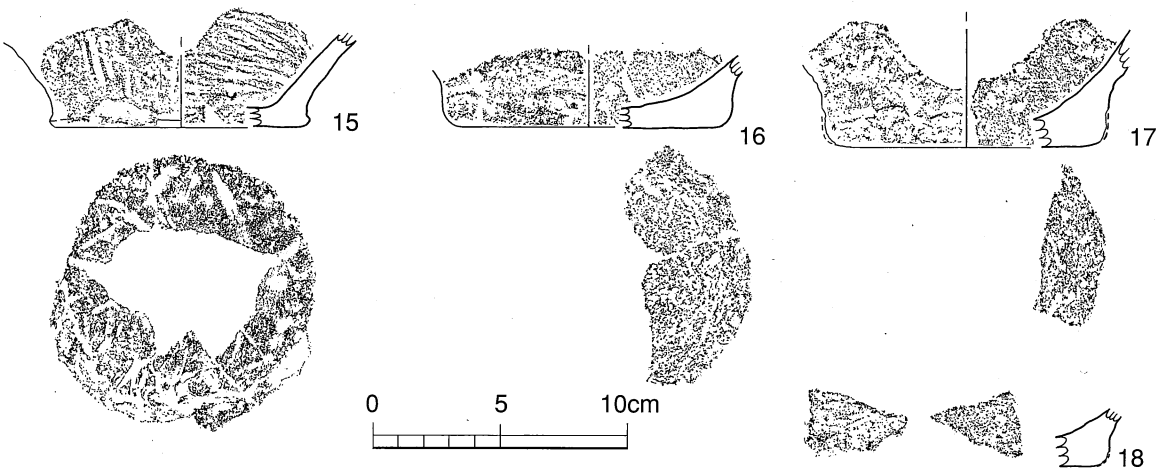
４類（第６図７・11・12）

いずれも小破片のみの出土である。内・外器面ともに、横または縦方向の条痕を施す。器壁は厚さ約10㎜とやや厚めである。

７は断面形舌状を呈する口縁部である。内・外器面ともに横方向の条痕を施す。11・12は胴部片であり、同一個体だと考えられる。いずれも、外器面に横方向の、内器面に縦方向の条痕を施す。



第６図　縄文時代晩期土器(1)(1／3)



第７図　縄文時代晩期土器(2)　(1／3)

５類(第６図13)

13は深鉢の胴部片である。外器面はススが付着しており、横方向のナデを施している。内器面の調整は剥落しており不明である。

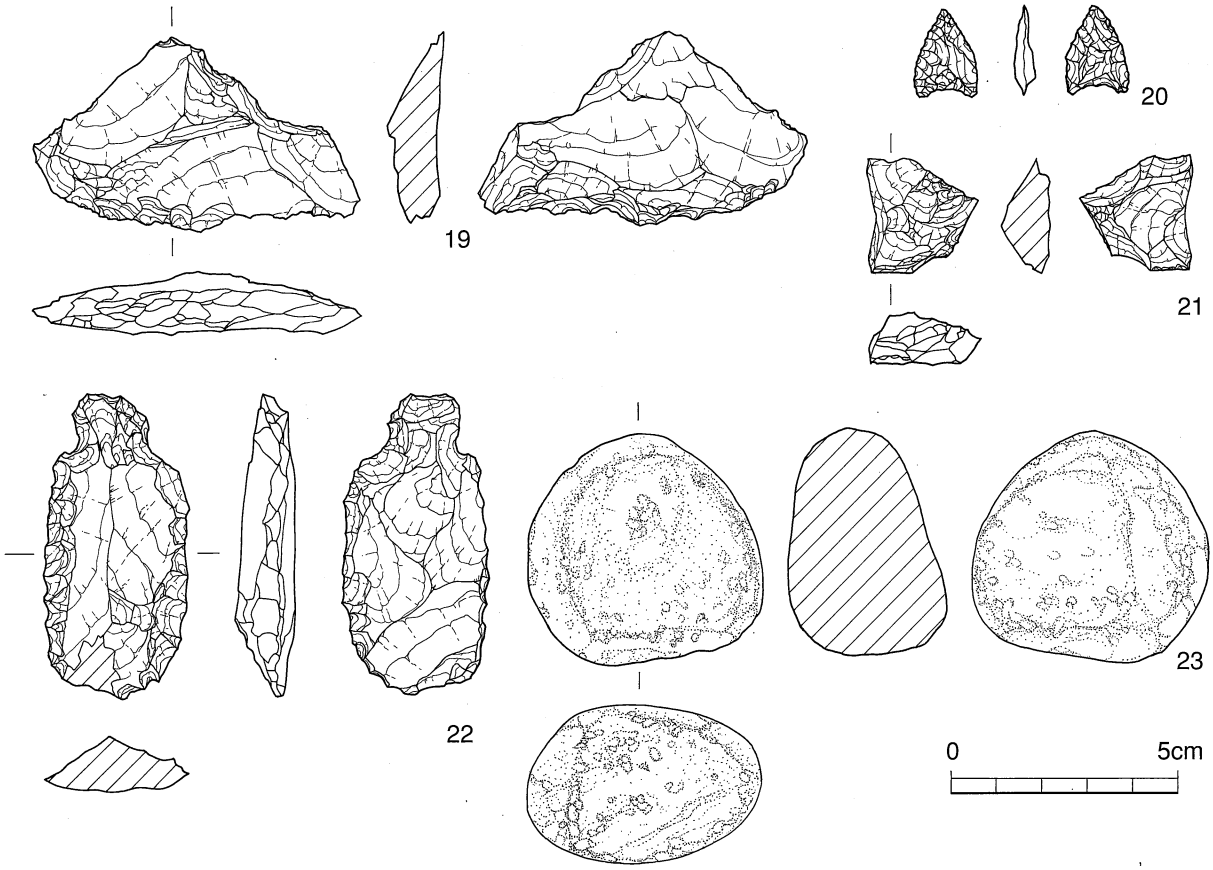
６類(第６図14)

14は浅鉢の胴部片である。シャープに屈曲し、張り出しのある形態である。器面調整は内・外器面ともに横方向の丁寧なナデを施す。

７類(第７図15～18)

型式不明の底部を一括した。いずれも丸底である。

15は胴部から外反し、張り出した底部端につながる。内・外器面ともに板状工具と棒状工具で器面調整を行っている。16～18は、胴部から外反し、垂直気味に立ち上がる底部端につながる。風化による剥落が激しく詳細な器面調整は観察できないが、ナデ調整を施す。



第８図　縄文時代石器　（３／５）

・石　器(第８図)

削器１点・石鏃１点・石匙１点・叩石１点・二次加工剥片１点が出土した。

削　器(第８図19)

19は頁岩製横長剥片を素材とし、下側縁に両面から明瞭な加工を施している。上片側縁にも加工が片面のみ加工が施してあるが、明瞭ではなく刃部として使用していたのかは不明である。

石　鏃(第８図20)

20は青色系チャート製で、鏃身の両側縁が緩やかに屈曲し五角形に近い平面形をなす凹基無茎鏃である。表面には全面に加工を施しているが、裏面は側縁周辺にのみ加工を施している。

石　匙（第８図22)

22はホルンフェルス製縦長剥片を素材とし、背面・腹面両面の両側縁には丁寧な加工が施してあり刃部を作り出している。尖端が欠損しているが、打面下方を加工してつまみ部を作り出している。

敲　石(第８図23)

23は凝灰岩製で、小型ではあるが底部及び両側面の縁辺部と中心部に敲打痕だと考えられる凹部が認められる。

二次加工痕のある剥片(第８図21)

ここでは、剥片の一部に未連続の加工を施したものを「二次加工痕のある剥片」として扱う。21はチャート製不定形剥片で一部欠損しているが、一側縁にのみ未連続の加工痕跡が認められる。

第２節 その他時代の遺構と遺物

時代を特定し得ない遺構として溝状遺構２条を検出した。また、縄文時代以外の遺物が若干出土している。

・溝状遺構(第９図・第10図)

１号溝状遺構(ＳＥ１)

調査区南側で10Ｄグリッド付近(第５図参照)で検出された。調査区が狭小なため検出範囲が制限され長さは不明であるが、幅約200cmで北から南に延びる。断面形はＶ字状を呈し、検出面からの深さ約80～100cm である。溝の法面は左右とも２～３段の段状になっている。溝の底部中心には直径50～60cmの窪みがあり、その窪みの中からは40cm前後の大振りな凝灰岩が多数検出された。この窪みは流水の作用によって作り出されたものだと考えられ、溝状遺構が立脇川に合流する方向に向かって検出されたことと併せて考えると、流路的な機能が推測される。また、両側に方形の掘り込みが確認され、橋を架けた痕跡の可能性がある。遺物は縄文土器片６点(第６図８・９)土師器１点(第11図－27)が検出された。

２号溝状遺構(ＳＥ２)

ＳＥ１同様調査区南側の10Ｄグリッド(第５図参照)に位置し、ＳＥ１を切る形で検出された。遺構が調査対象区外にかかり全容は確認できなかったが、幅約50～110cmで北東から南西に延びる。断面形は浅いＵ字状を呈し、検出面からの深さ約30～50cm である。底部と考えられる層(第10図Ｅ～Ｅ’－⑧層)において鉄分の沈着が確認され、ＳＥ１同様に流路的な機能が推測される。遺構に伴う遺物は検出されていない。

・表土・包含層出土の遺物(第11図24～29)

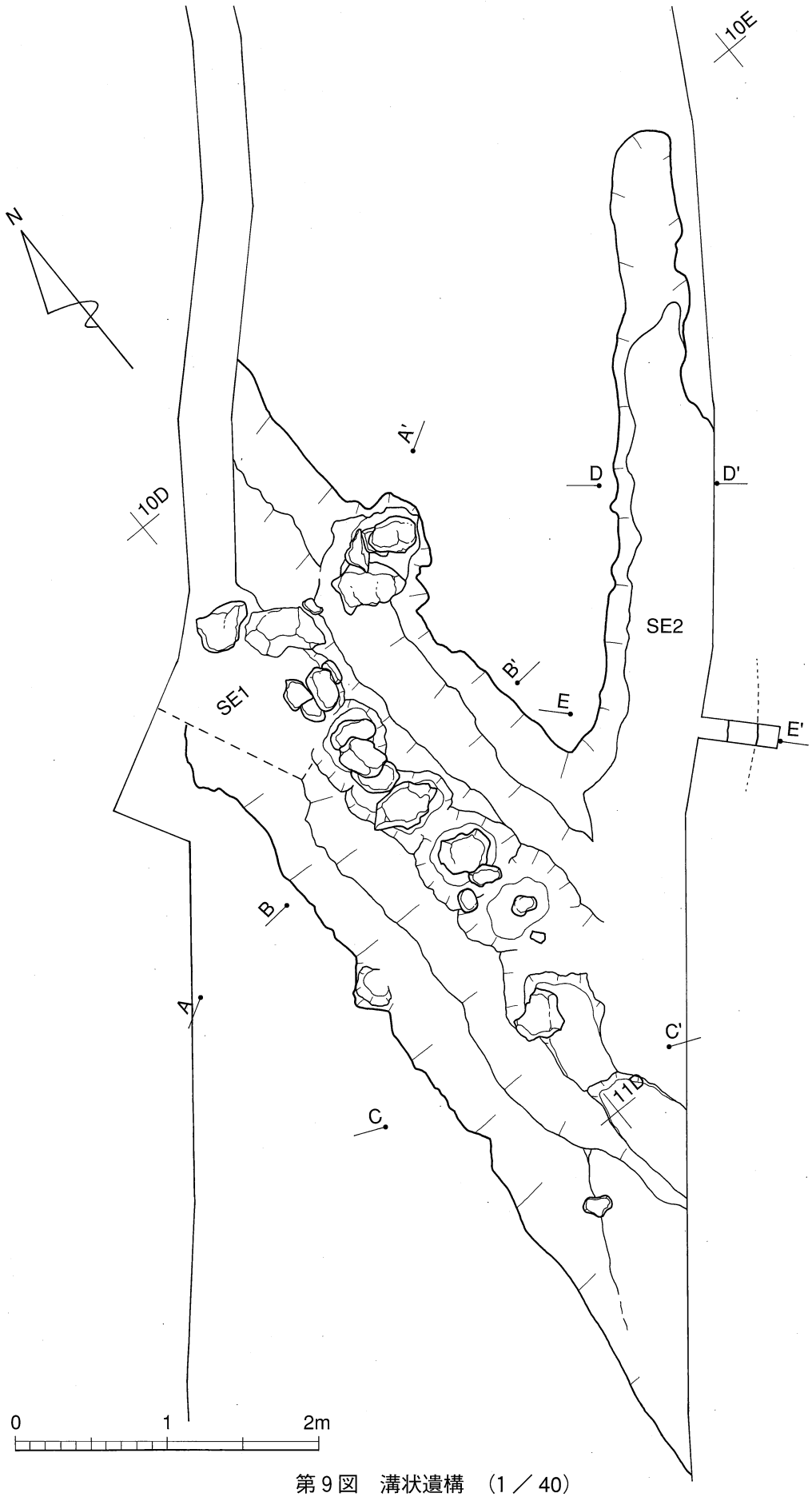
時期を限定し得ない土器・鉄器が、表土・溝状遺構・包含層から若干出土した。

土　器(第11図24～28)

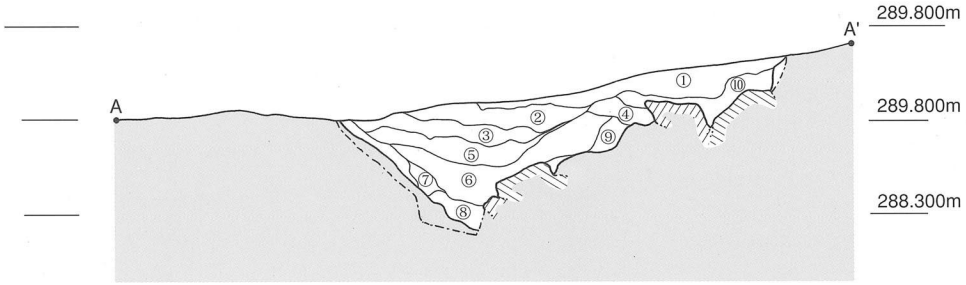
24・25は同一個体だと考えられる甕の口縁部である。ＳＥ１と表土から出土した。いずれも、外器面には横方向のハケ目の上から横方向のナデを、内器面には横方向のハケ目を施している。口唇部にはミガキを施している。26は表土から出土した甕の口縁部である。口唇部は断面形舌状を呈し、口縁部は外反する。内・外器面には横方向の工具によるナデを施している。27はＳＥ１から出土した甕の胴部であり、外器面に格子目のタタキを施した後にナデを施している。28は第Ｖ層下部～第Ⅵ層上部から出土した甕の胴部である。外器面は斜方向にハケ目を施した後に横方向のナデを、内器面は横方向のハケ目の後に横方向のナデを施している。

鉄　器(第11図29)

表土より１点出土した。残存状況が悪く詳細まで観察することは困難ではあるが、鉄製鋤先の一部であると考えられる。

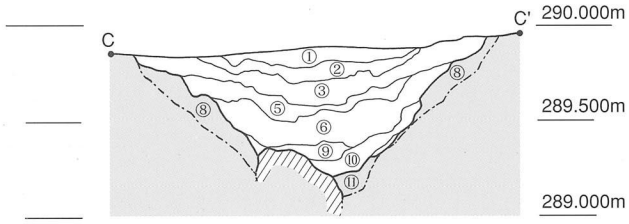


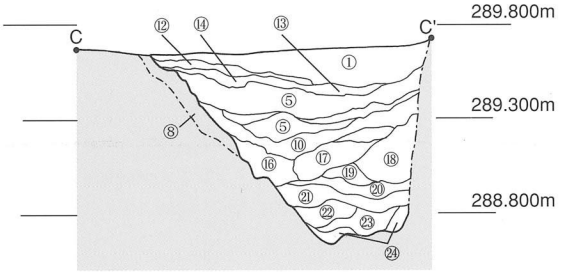
第９図　溝状遺構　（1／40）



A～A' 土層註記

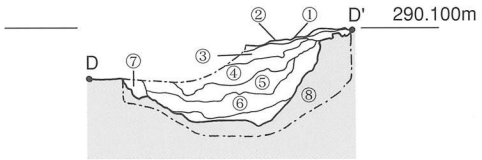
①暗褐色土　黒褐色土塊（1㎝前後）を多量に含む。
②黒褐色土　やや硬め。炭化粒を多量に含む。
③黄褐色土　わずかに粘性をもつ。
④暗黄褐色土　わずかに粘性をもつ。
⑤黒褐色砂質土　黒褐色砂質粒（1㎜前後）を多量に含む。
⑥黒褐色土　炭化粒と黄褐色土粒（5㎜程）を少量含む。
⑦暗褐色土　黄褐色土塊（0.5～2.0㎝）を多量に含む。
⑧褐色土　土質はソフトでしまりが弱い。
⑨褐色土　黄褐色土塊（5㎜前後）を含む。
⑩黒褐色土　炭化粒・黒色土粒（1㎜前後）を含む。

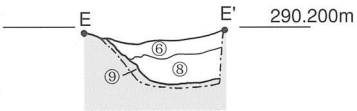




B～B'・C～C' 土層註記

①～⑧はA～A'の土層註記と同じ
⑨黒褐色土　黒褐色のスコリア（5㎜前後）を含む。
⑩黒褐色土　黄褐色土粒（5㎜前後）を含む。やわらかい。
⑪暗褐色土　粘性わずかにあり。やわらかい。
⑫黒褐色土　しまりがある。ややかため。
⑬黒褐色砂質土　下部に黄褐色土粒（5㎜以下）を多く含む。
⑭暗褐色土　大きめの黄褐色土粒（1㎝前後）を多く含む。やわらかい。
⑮暗黄灰褐色土　灰黄褐色土塊（2㎝以下）を含む。やわらかい。
⑯黒褐色土　炭化物を含む。粘性あり。ややかたい。
⑰暗オリーブ褐色土　しまりがある。かたい。炭化物を少し含む。
⑱暗青灰褐色土　非常にしまりがありかたい。下部に酸化の痕跡が確認できる。
⑲暗オリーブ褐色土　しまりがある。かたい。黄褐色土粒（5㎜前後）を含む。
⑳暗灰褐色土　ややしまりがあり少しかため。わずかに粘性がある。
㉑暗オリーブ褐色土　砂粒は細かくしまりあり。黒色シルト土塊を含む。
㉒暗黄褐色土　砂粒が細かくやわらかい。しまりはない。
㉓黒黄灰褐色土　黒色砂質土と褐色土がラミナー状に堆積する。ややかたい。
㉔暗黄灰褐色土　ややかたくしまりがある。黄褐色土と暗青灰褐色土の混合堆積。

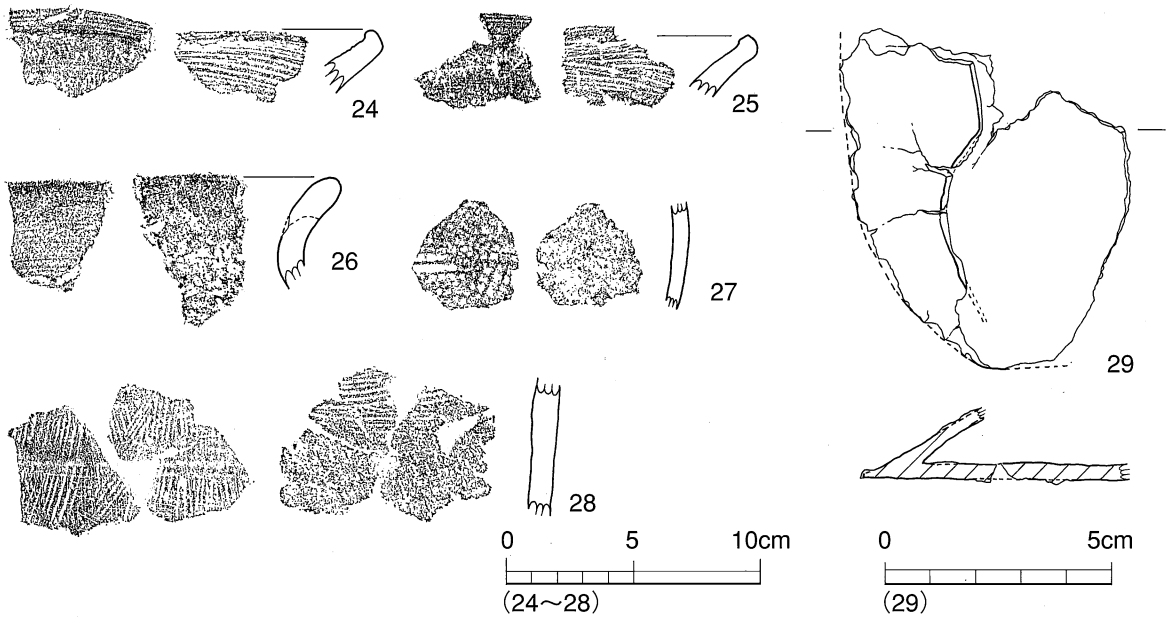




D～D'・E～E' 土層註記

①暗褐色土　小礫（2～5mm）・黄褐色土塊（7mm前後）を多量に含む。
②黄褐色土　アカホヤ火山灰と考えられる橙褐色土塊を多量に含む。
③黒褐色土　黒褐色土粒（3cm前後）・黄褐色土（1cm前後）を含む。
④暗オリーブ褐色土　黄褐色・橙褐色土粒（1mm前後）を多量に含む。
⑤暗褐色土　橙褐色粒（1mm前後）を含む。柔らかくわずかに粘性がある。
⑥褐色土　黄灰褐色土粒（1～3mm）を含む。土質は柔らかい。
⑦黄色褐色土混褐色土　柔らかく、しまりがない。木根痕跡だと考えられる。
⑧暗青灰褐色土　土層上部に酸化が、下部にはにラミナ状堆積が確認できる。
⑨橙褐色土　アカホヤ火山灰の二次堆積層だと考えられる。

第10図　溝状遺構土状断面図　（1／40）



第 11 図　出土石器・鉄器観察表　(1／3)　鉄器　(3／5)

番　号	器　　種	石　　材	出土層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)
19	削　　器	頁　岩	Ⅷ層	4.25	7.15	1.25	28.6
20	石　　鏃	チャート	Ⅷ層	1.9	1.4	0.45	0.9
21	二次加工剥片	チャート	Ⅷ層	2.55	2.5	1.15	6.9
22	石　　匙	ホルンフェルス	Ⅷ層	6.6	1.3	1.2	26.9
23	敲　　石	凝灰岩	Ⅷ層	5.1	5.25	3.55	101.9
29	鉄製農耕具		Ⅰ層	7.5	6.1	0.4	59.1

第1表　出土石器・鉄器観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底型	器高	外面	内面	外面	外面		
1	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅷ層	41.0			口唇部に縦立の刻みを持つリボン状突起、工具による横方向のナデ、黒変	工具による横方向のナデ、黒変	灰褐	灰黄褐	5mm 以下の褐・灰白色砂粒、柱状の黒光沢柱	
2	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅷ層	43.2			内、外面からの補修孔、未貫通の補修孔、工具による横方向によるナデ、黒変	工具による横方向のナデ、黒変	灰褐	灰黄褐	2mm 以下の灰白色砂粒、柱状の黒光沢柱	
3	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅷ層				工具による横方向のナデ、黒変	工具による横方向のナデ、黒変	黒褐	黒褐	灰白色の微細な柱	2と同一
4	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅷ層				工具による斜方向のナデ、黒変	工具による斜方向のナデ、黒変	灰褐	灰褐	5mm 以下の灰・灰白色砂粒	
5	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅷ層				口唇部に丁寧なナデ、工具による斜方向のナデ、黒変	工具による横方向のナデ、黒変	浅黄橙	にぶい黄橙	3mm 以下の褐・灰色砂粒、2mm 以下の黒・褐色砂柱	
6	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅷ層				口唇部に丁寧なナデ、斜方向のナデ、黒変	工具による横方向のナデ、黒変	橙	にぶい黄橙	5mm 以下の灰白色砂粒、3mm 以下の褐・黒色砂柱	
7	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅷ層				条痕の後ナデ、黒変	横方向の条痕の後デナ	灰褐	にぶい褐	2mm 以下の灰白色砂粒	
8	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅷ層				工具による横・斜方向のナデ、黒変	工具による横方向のデナ	にぶい橙 灰褐	にぶい褐 灰褐	6mm 以下の灰・灰白色砂粒	
9	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅷ層				工具による横方向のナデ 黒変	横方向のデナ 黒変	にぶい橙 明赤褐	にぶい褐	6mm 以下の灰色砂粒	
10	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅷ層				工具による斜方向のナデ 黒変	工具による斜方向のナデ、黒変	にぶい褐	にぶい黄褐	1mm 以下灰色砂粒 黒色光沢粒	
11	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅷ層				横方向の沈線条痕文 黒変	縦方向の沈線条痕文	灰褐	灰褐	5mm 以下の灰白色砂粒3mm 以下の褐色砂粒、微細黒色光沢粒	
12	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅷ層				横方向の沈線条痕文	縦方向の沈線条痕文	灰褐	灰褐	7mm 以下の褐色砂粒、2mm 以下の灰白色すな柱、黒色光沢粒	
13	縄文土器	深鉢 口縁～胴部	Ⅷ層				工具による横方向のナデ 黒変	剥落により不明	にぶい褐	灰黄褐	5mm 以下の灰・灰白色砂粒	
14	縄文土器	浅鉢 口縁～胴部	Ⅷ層				工具による丁寧なナデ 黒変	工具による横方向の丁寧なナデ、黒変	にぶい橙	灰黄褐	1mm 以下の灰白色砂柱	
15	縄文土器	深鉢 底部	Ⅷ層				板状・棒状工具による斜方向のナデ	板状・棒状工具による斜方向のナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	にぶい黄橙 にぶい橙	6mm 以下の灰白・褐色砂粒、1mm 以下の灰色砂粒	
16	縄文土器	深鉢 底部	Ⅷ層				工具による横方向のナデ 黒変	斜方向のナデ	にぶい橙 灰・褐	灰黄褐	4mm 以下の灰・灰白色砂粒	
17	縄文土器	深鉢 底部	Ⅷ層	10.4			工具による横方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	灰黄褐	2mm 以下の灰・灰白色砂粒	
18	縄文土器	深鉢 底部	Ⅷ層	10.4			横方向のナデ	ナデ	にぶい橙	灰黄褐	4mm 以下の灰・灰白色砂粒	
24	土師器	甕 口縁部	表土				口唇部に丁寧なナデ、横方向のハケ目の後横方向のナデ	横方向のハケ目	橙	橙	2mm 以下の灰白・褐灰・褐色砂粒	
25	土師器	甕 口縁部	SE 1				口唇部に丁寧なナデ、横方向のハケ目の後横方向のナデ	横方向のハケ目	にぶい橙	にぶい橙	2mm 以下の灰・灰白色砂粒	24と同一
26	土師器	甕 口縁部	表土				工具による横方向のナデ	横方向のデナ 黒変	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm 以下の灰白・褐灰砂粒	
27	土師器	甕 胴部	SE 1				格子目のタタキの後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm 以下の灰色砂粒	
28	土師器	甕 胴部	Ⅴ層+Ⅵ層				斜方向のハケ目の後横方向のナデ	横方向のハケ目の後横方向のナデ	橙	橙	5mm 以下の灰白砂粒、2mm 以下の褐灰・褐色砂粒	

第2表　出土土器観察表

第Ⅳ章　まとめ

山中前遺跡は、夷守岳(標高1,344 m)より派生する標高292mの扇状地上に位置する。この扇状地上では、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡がいくつか確認されている。山中前遺跡も1963･1964年に調査が行われ、縄文時代後期から弥生時代にかけての遺跡として認識されていた。今回の発掘調査は、主に縄文時代晩期の遺物を検出した。ここでは簡単ではあるが、検出された遺構・遺物についてまとめを述べる。

1　山中前遺跡(1963・1964年調査分)について

第Ⅱ章－第1節で書いたように、1963･1964年に宮崎県教育委員会が調査を行った記録がある。調査報告書（石川－1964年）によれば、出土遺構は敷石住居1基、出土遺物は縄文土器･石器であり、縄文土器が大平式・綾式であることから縄文時代後期に位置付けている。

1963･1964年調査は報告書において調査位置図が示されておらず、今回調査との位置関係については不明瞭である。報告書の記述によれば「字山中前5696-2番地」と記されており、今回調査の「字山中前5678-2・5679-3番地」と若干地点が異なる。しかし両調査区域は、『小林市遺跡詳細分布調査報告書』（小林市教育委員会－1993年）の定めた山中前遺跡の範囲に入るので、同じ「山中前遺跡」として扱う。

2　縄文時代について

出土土器について

山中前遺跡においては、主として縄文時代晩期の黒色磨研系土器が出土した。1～3類は、若干の差異こそあるものの (1)外側に大きく開く口縁部 (2)「く」字状に外反する頸部と胴部 (3)器面調整は板目状工具によるナデ を特徴とする。いわゆる「入佐式土器」であり、中でも新しい段階の範疇に入ると思われる。類似する土器は鹿児島県飯盛ヶ岡遺跡(鹿児島県立埋蔵文化財センター－1993年)などで確認されている。本遺跡出土7類の底部(第7図15～18)も、平底の底部端が張り出した形態であり、入佐式によく見られる底部の特徴を示している。また、同じ入佐式の中でも特徴的なものも見られる。縄文時代晩期の土器にリボン状突起をもつものは多く確認されているが、本遺跡においても確認されている。1類の中に、口縁部に3本の縦位刻目を施したつまみのようなリボン状突起をもつもの(第6図1)がある。

出土石器について

石器類は全部で113点出土した。石材の内訳は、チャート89点（78.8%）･黒曜石17点（14.9%）･輝石安山岩4点（3.6%）・ホルンフェルス1点（0.9%）・凝灰岩1点（0.9%）・頁岩1点（0.9%）である。器種構成は、削器1・石鏃1・石匙1・敲石1・二次加工のある剥片1、その他は全てチップ・フレーク類である。チップ・フレーク類は、チャート・黒曜石・輝石安山岩に石材が限られ、10Dグリッド(第5図参照)東側に集中する。このことは、10Dグリッド東側付近で石器製作が行われていた可能性を示

す。またホルンフェルス製石匙・頁岩製削器・凝灰岩製敲石は、周辺に同石材のチップ・フレーク類がないことから、製品を別の場所から持ち込んだ可能性がある。

３　溝状遺構について

溝状遺構は２条検出された。

１号溝状遺構（ＳＥ１）は、⑴埋土（第10図－Ｃ～Ｃ’間第⑱層）に鉄分沈着の痕跡が見られること ⑵遺構底部と考えられる近くの層（第10図－Ｃ～Ｃ’間第㉓層）でラミナー状堆積が確認されたこと ⑶立脇川の方向に向かっていること　などから、流路としての利用が考えられる。また、遺構が幅約200cmのＶ字形状に一定していることを考えると、人工的遺構の可能性がある。年代については不明であるが、遺構中の埋土中に奈良時代～平安時代と思われる甕の破片（第11図27）が出土しており、それ以前の時代の遺構であることは確かである。また両側に方形の掘り込みが１カ所ずつあり、橋を架けた痕跡の可能性がある。

２号溝状遺構（ＳＥ２）はＳＥ１を切るような形で検出された。ＳＥ１との前後関係には不明な点が多いが、ＳＥ２は土層断面の観察によるとＳＥ１と同時期かそれ以降の時期の遺構だと考えられる。ＳＥ２もＳＥ１と同様、遺構面だと考えられる近くの層（第10図－Ｄ～Ｄ’　間第⑧層）で鉄分の沈着とラミナー状堆積が確認されていることから、流路としての利用が考えられる。

【参考文献】

石川恒太郎 1964 「小林市中山前遺跡調査」『宮崎県文化財調査報告書　第九輯』　宮崎県教育委員会

小林市教育委員会 1993 『小林市遺跡詳細分布調査報告書』小林市埋蔵文化財調査報告書第７集

堂込秀人 1997 「南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分－」『鹿児島考古　第31号』鹿児島県考古学会

下山　覚 1985 「「黒川式土器」細分の為の基礎論」『鹿大考古　第３号』鹿児島大学法文学部考古学研究室

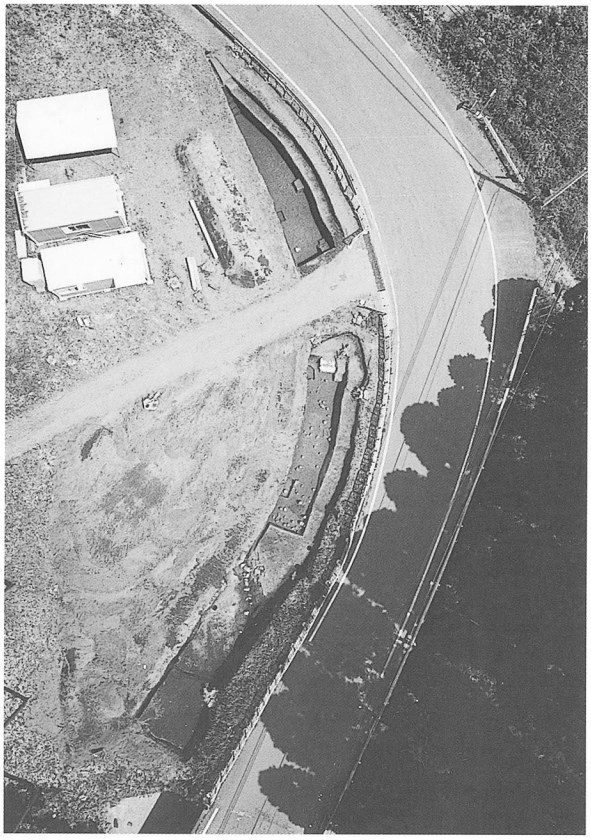
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993『飯盛ヶ岡遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書⑶　鹿児島県立埋蔵文化財センター

図版1

山中前遺跡全景

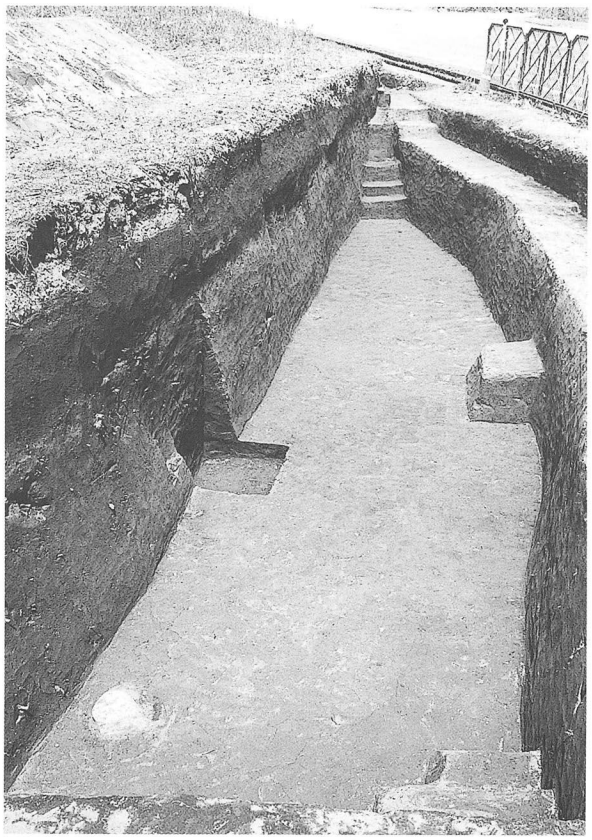
図版2

山中前遺跡遠景

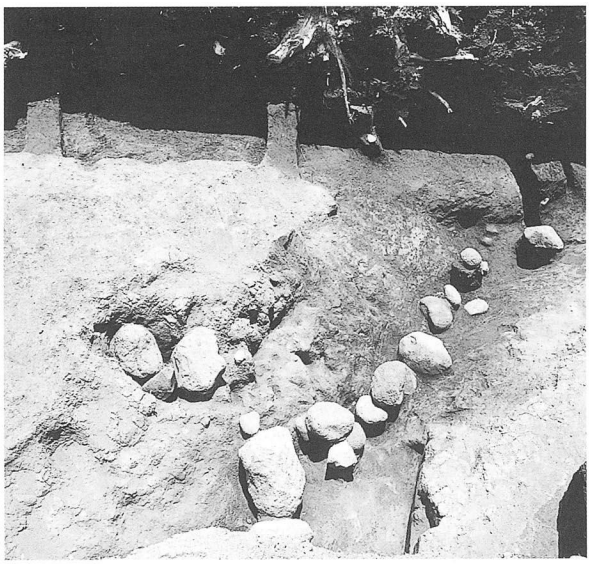


調査区全景

第Ⅷ層検出状況（南側）

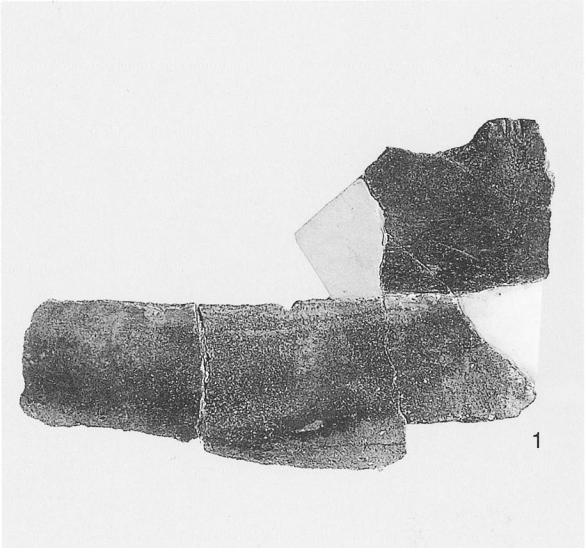


第Ⅷ層検出状況（北側）

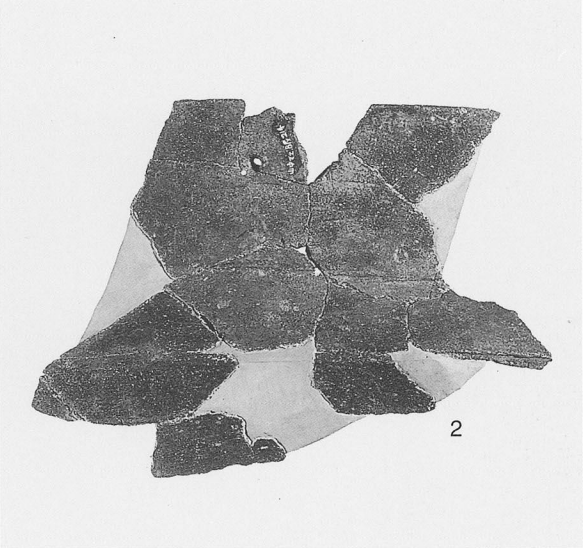


溝状遺構

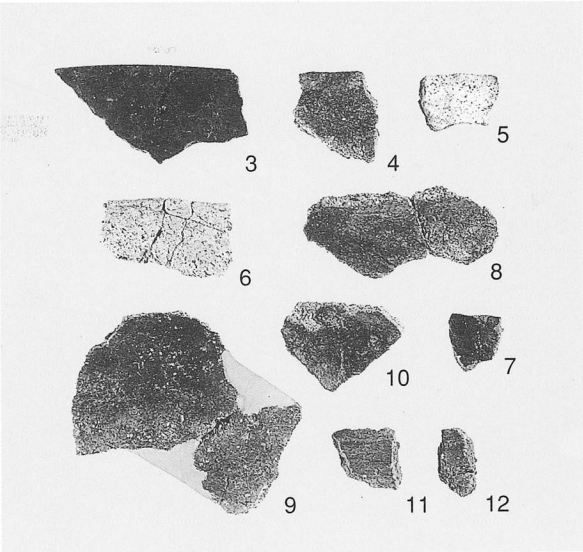
遺物検出状況（第Ⅷ層）



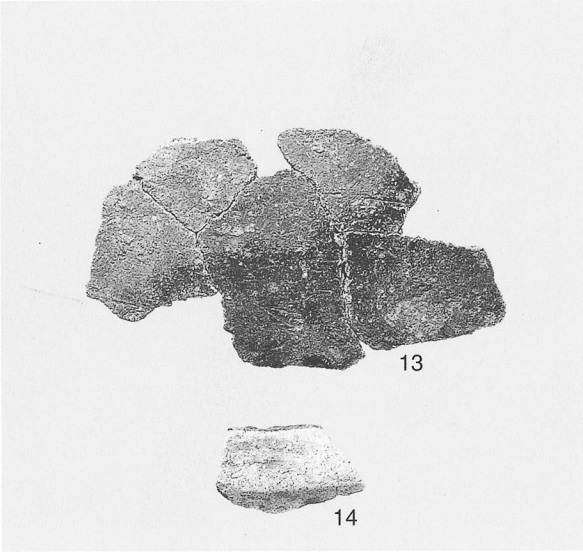
縄文時代晩期土器　1類①



縄文時代晩期土器　1類②

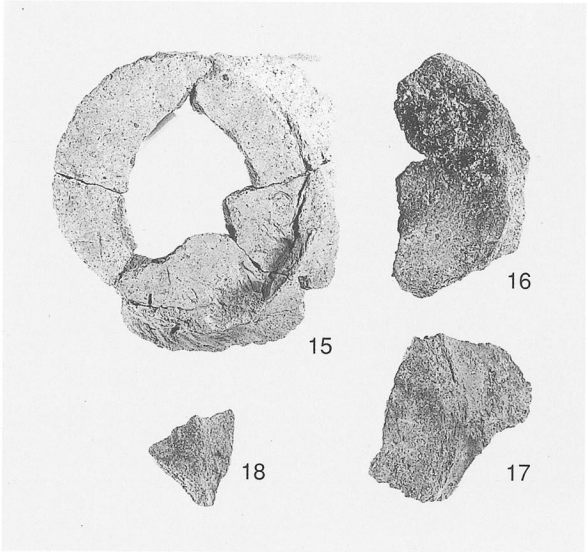


縄文時代晩期土器　1～4類

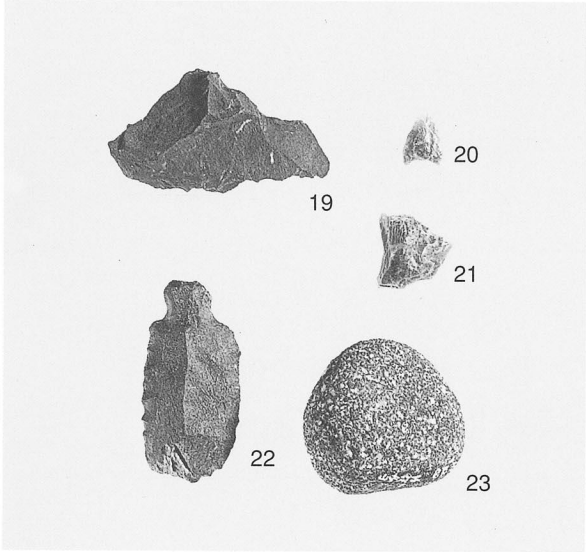


縄文時代晩期土器　5・6類

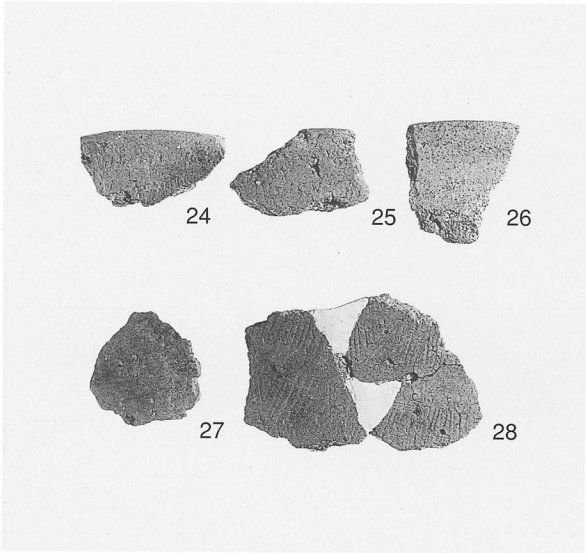
図版4



縄文時代晩期土器　７類



縄文時代晩期石器



表土・その他包含層出土土器

表土・その他包含層出土鉄器

報告書抄録

フリガナ	ヤマナカマエイセキ
書名	山中前遺跡
副書名	一般県道霧島公園小林線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第1集
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第26集
編集者名	甲斐 貴充
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
発行年月日	2000年3月31日

所収遺跡名（フリガナ）	所在地（フリガナ）	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
山中前遺跡（ヤマナカマエ イ セキ）	小林市大字（コ バヤシ シ オオアザ）細野字山中前（ホソ ノ アザヤマナカマエ）	32° 00′ 04″ 付近	130° 58′ 20″ 付近	1999.4.12 ～ 1999.5.21	224 ㎡	県道改良工事

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	縄文（晩期）	溝状遺構 2	縄文土器 石器	

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第26集

山中前遺跡

一般県道霧島公園小林線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　2000年3月

発　　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212
宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
電　話 0985-36-1172

印　　刷　有限会社　鉱脈社
〒880-0855　宮崎県宮崎市田代町263番地
電　話 0985-25-1758